

## 醒世姻縁傳の話

松枝, 茂夫

<https://doi.org/10.15017/2556562>

---

出版情報 : 文學研究. 32, pp.73-112, 1942-12-30. 九州文學會  
バージョン :  
権利関係 :



# 醒世姻縁傳の話

松 枝 茂 夫

聊齋志異といふ本を私は前から好かぬ。勿論四百三十何篇の話を全部讀んだ上でさういふのではない。虫がすかぬといふのであらうか、三篇と續けて讀む氣がしないのであつた。いやらしい。何かしらんが、べと／＼したやうな感じが先きに立つて、たゞもういやらしい。私は必ずしも「五通」といつた思つてもいやらしい神を取扱つた篇々について云つてゐるのではない。全体から受ける感じがさうだといふのだ。このあひだも目加田さんにそのことを話したら、目加田さんはあまり賛成できない風であつた。「瞳人語」といふのは讀みましたか。ある男がどうやらして盲目になつた。ところが或日ふと氣がつくと、左右の眶の中にそれ／＼何物かがゐて、兩方しきりに話し合つてをり、「どうもかうまつくらではやりきれないなあ、どうだい一つ外へ遊びに行つてみようぢやないか」などと云つて、そのうちに鼻の中がむづ／＼したかと思ふと、何やら兩方の鼻の孔を抜けて出て行つたけはいである。大分たつてから歸つて來てそれ／＼同じ道を通つて元の眶の中に納まり、「久しく花園を見に行かぬうちに蘭がすつかり枯れてしまつてゐた」などと話してゐる。この男はかねて蘭をこよなく愛してゐたのだが、失明してからは心にもなく打棄てゝゐたの

であつた。そこでさつそく妻にさういつて確かめさせると、果して枯れてゐたので、不思議なこともあるものよと思つた。やがて妻は夫の鼻の孔から出入りしてゐるものの正体が豆粒ほどの大きさもない小人であることを發見した。それから更に二三日たつて、男はまた小人たちの問答をきいた。「隧道がひどく遠廻りなものだから不便でいけない、門をあけようぢやないか」やがて右の扉の中から、「こちらの壁は堅くて駄目だ」といふと、左の方で、「ぢやこちらをやつてみよう、どうせ一緒に暮すことにすればいゝわけだ」といふやうなことをいつて、左の扉の内側を引掻くやうな感じがしたかと思ふうち、左の目がパツとひらいて物が俄かにはつきり見えるやうになつた。そしてそれはゆるゆる重瞳で、さてこそふたりの瞳人が一つ扉の中に同居してゐるのだとわかつた。それ以後この男は、片目は依然つづけてゐたけれども、満足に二つの目をもつた人々よりもずつとよく物を見ることが出来るやうになつたといふ話である。どうですこの話は。北原白秋の洗心雑話だつたかに引いてありますよ。さう／＼それから又こんな話もある。紹介者は佐藤春夫だつたかしらん。題も忘れましたが、何をいはれてもケロ／＼笑つてゐる女の話がありましたね。あれなんかほんとうに氣持のよい、うれしくなるやうな話であつた。白秋とか春夫といつた人はさすがによい目を持つてゐますね。ごみだめからでも眞珠を捜し出す、えらいものです。さう事を分けていはれてみると、私は、例によつて、一言もない。うむといつたきり、頭でも搔くより外に手は出ないのである。あわてて、歸つてから聊齋を引き出して、そのケロ／＼笑つてばかりゐるといふ美しい女妖の話を捜してみた。すぐにみつかつた。「嬰寧」のことであるに相違ない。讀んでみると成程おもしろい。そしてどうも昔一度よんだらしい記憶さへかすかに甦つて來て、今更ながら舌打ちされるのであつた。これなどは恐らく聊齋中でも屈指の名篇ではあるまいか。ついでに佐藤さんの「玉簪

花」をとり出してバラ／＼読みかへしてみる。「緑衣の少女」「戀するもの道」「碧色の菊」「流謠の神」いづれもみな聊齋のものである。そして、甚だ残念ながら、みなよい。聊齋にかういふ詩趣豊かなものもあつたのかと一寸見返る氣持にならざるを得ない。これはどうだ／＼と聊齋の中から一篇々を取り出して責めつけられると、いくら不遜の私でも成程御尤も／＼とたゞもう頭を搔いて引退る外はないのである。だが、それでも依然として、私の頭のどこかに、なほ承服しえない、何か割りきれないものがあるのを私はどうすることも出来ない。聊齋には實に詩趣に富んだ面白いのが少くない。だが、それはそれとして明かに認めるにしても、聊齋を全体として覆うてゐる何かいやらしい感じ、それを私はどうすることも出来ないのだ。

なぜだらう。姑らく妄りに之を聽く心の餘裕が私に缺けてゐるのだらうか。さうではあるまい。さうは思ひたくない。豆棚瓜架下の百物語に初手から怖毛をふるつて寄りつかぬ仲間の一人でもないつもりだ。事實、聊齋には夜半便所に起きるのをためらはせるやうな恐ろしい話はいくらもない。たとへば「畫皮」といつたやうなものは、考へれば考へるほど恐ろしい話で、ある男が自分の戀してゐる女の部屋をそつと覗いてみたら、鋸のやうな齒をむき出した青面の厲鬼が、人間の皮を椅子の上ひろげ、彩筆でもつてそれに目鼻をかいてゐて、それを頭からかぶると忽ちきれいな女になつたといふのであるが、こんな恐ろしい話は聊齋ではむしろ例外に屬しよう。これだつて日本の怪談を思へば實は何でもないのだ。聊齋に出て來る狐狸のお化は十中の九までがひどく人間味を帯びてゐて、變化にはつきものであるべき妖氣を全然もたず、毫もその異物たるを覺えしめない。しかも嬉しいのは彼等が大抵濃かな愛情の持主であることだ。例の酒好きの狐のお化なんか、私だつて、車生ならずとも、これと管鮑の交りを結ぶのに躊躇するこ

とはあるまいと思ふし、いはんや色つぼい女に化けて出て來られた日には、相手を異物と方々承知でゐながらついでれ〜と深みにはまつてしまふ多くの男達のだらしなさを、私はむげに非難することはできない氣がする。聊齋の狐狸は、多くの場合、徳性に於いても人間より優れてゐる。高林靜夫氏がうまく書いてゐる。「普通吾々が考へる狐は、人間をだますものと理解されてゐるが、聊齋志異の狐の世界では、狐と人との關係は屢々逆になつてゐて、人間にさむかれ、裏切られ、傷付けられるものは殆ど狐の側にあるやうに取扱はれてゐる。又、裏切られた狐達は、多くの場合、相手の人間を恨みつゝも戀々として斷ち難い執著を感じてゐる。又狐が人間の批判者の立場に立つて、醜い人間性を痛烈に批判し輕蔑する場合も多い。」(中國文學第六十二號「聊齋志異の狐達」)

いくら狐達が妖氣を失つて人間化されてゐたとしても、又その徳性が人間より優れてさへゐたとしても、要するに異物は異物であつてみれば、これと狎れ〜しい交りをするのは、それこそいやらしいことではないか。殊に人間に對する彼等の姿態が「一個の淫蕩な娼婦の感じ」(高林氏)を興へるのだとすれば。文化の爛熟頽廢期によく見られる所謂エログロ趣味の現はれに外ならず、金瓶梅や三言二拍等のみに限らず明末文學を通じて感ぜられる一種の氣分をこれは代表するものではないか。怪談なら怪談らしく、晝間の留守居番を尻込みさせるやうな、三萬六千の毛孔が一齊にきゆうと引きしまるやうな、さういつたうんと物懐い奴ならまだしもよいのだ。それがでれ〜とすぐ妥協してしまふ、あの生ぬるい肉的な感じ、それがいやらしいのではないか。確かにこれは一つの重要な理由になる、だが、まだ〜それだけでは私の感じを説明し足りない。

著者蒲松齡の人間がいやらしいからだ。實は蒲松齡の經歷をよくも調べてみない前から私はさう決めてしまつてゐ

たのだつた。彼が棺桶に片足を突込んだやうな齡になつてもなほ進取の念を絶ちえずに科擧場裡に彷徨したといふ一事を思つただけで、この不運な萬年落第生を哀れむよりは先きに、蒲松齡といふ男が度しがたい因業おやぢとして私には想像されるのであつた。昔から諛墓なんといふ語があるのでもわかる通り、一般に墓誌銘なんてものは信用のできぬものときまつてゐるが、張元の「柳泉蒲先生墓表」もどうやらその例に洩れぬ。少くとも「棘園に入り輒ち斥けらるるや慨然として曰く、それ命なるかな。是をもて決然捨て去つて益々肆に古文辭に力め」云々はいかにも怪しいものだ。こんな嘘つばちを書くものだから「先生は性樸厚、交遊に篤く、名義を重んじ、而して孤介峭直、尤も時と相俯仰すること能はず」といふやうな文字に對してまで、つい私は肩に唾を附けてかゝらうとし、因業おやぢといつた恐らく不當な冠を彼の頭にかぶせたくなつてしまふのだ。彼自身の作つた「元配劉孺人行實」に據れば、彼の妻劉氏は至つて溫良で無口なつゝしみ深い良妻であつたらしく、その間に四男一女を儲け、家の暮しは相當以上に裕かであつたやうだ。彼の子供達はみな出來がよかつたのであらう、彼が五十の頃にはすでに長男は廩生に補せられてをり三男四男みな進學し、長孫すら早くも童子科第一席に及第してゐた。それなのに彼はよい年をしながら孫子のやうなものの中にまじつて毎年々々試験をうけに行き、みつともないからもうおよしなさいと妻から勸止されてもきかなかつた。若しも試験運がおよろしかつたら今頃はとうに台閣に列していらつしやる筈です。山林自ら樂地あり、何ぞ必ずしも肉を以て鼓吹し快と爲さんや、とまさかそんなむづかしい言葉は使はなかつたらうが「行實」にはさう書いてある。だが、ひたすら名利にこがれた彼の耳には、折角の妻の忠言も聞えはしなかつた。自分の子や孫にさへ入關できたのだから、その父であり祖父である自分に及第の望みがないとはどうしても考へられなかつたのも無理はない。

時には、今年は必ず及第するよ、その證據にはしかくゝのめでたい前兆があつた、とそこはお得意のお伽噺(多分?)をいくさりやつて妻にへつらつたこともあつた。時には、かうして苦勞して試験を受けるのも結局はお前さんのためだと云はんばかりに「穆如たる者、夫人となるを欲せざるか」とにやゝ笑ひながらいつたこともある。それに對して彼の妻は「我に他の長なし、たゞ止足を知る。今三子一孫よく書香を繼ぎ、衣食は凍餓に至らず、天の賜厚からずと爲さず。自ら顧ふに何の功德ありてか尙缺望を存せんや」と答へてゐる。こゝらはどうみても妻君の方に軍配をあげざるを得ない。かうして彼は「年七十にして遂に歸老し、復た他遊せず」と自分で云つてゐるが、それさへ果してどうか疑へば疑はれるのであつて、彼は死ぬ僅か四年前に(彼の卒年に關しては七十六歳説と八十六歳説と二説あり、胡適は前説を是なりとしてゐる。)始めて歳貢生と成つてゐるやうな始末だ。まことに往生際の悪いことであつた。私の所謂因業おやぢの稱もまんざらでもないやうな氣がする。

狐は胡と音通じ、聊齋の狐の話はみな清朝を罵つたものであるといふ説がある。これくらゐの出鱈目なコジツケはない。彼は明朝に生れたとはいへ、彼五歳(或は十五歳)の時に明朝は事實上すでに滅びてしまつてゐるのだから、彼があつたやうに熱心に受けたのはみな清朝の試験であつた筈だ。役人となつて出世さへ出来たならば、それが明朝であらうと清朝であらうと、彼にとつてはどうでもよかつたのではないか。「而してその生平の佗憊志を失ひ、溘落鬱塞せるにより、時事を俯仰して悲憤感慨、又以てその志氣を激すること有り。故にその文章は穎發蒼聲、恢詭魁壘、もつて能く町畦を絶去し、自ら一家を成す」と墓表にある張元のことば——張元に限らず、蒲松齡の性格文章に對する諸家の見方はみな似たり寄つたりで、大抵この數語を出でないのだが——は、私には必ずしもそのまゝ頂戴は出来か

ねる。いはんや彼を以て「清初亂離の時事を目撃し、狐鬼に假借して一書に纂成し、以て孤憤を抒べて驗識する者」となす新世説の説の如きは全く附會の説である。私は考へる。新世説は更に、聊齋志異が四庫全書の説部に收められなかつた所以は、その「羅刹海市」の一則が、「滿人を譏諷し、時政を非刺するの意を含有せる」が爲であるといつてゐるが、これ亦甚だ謂はれなき説であると思ふ。右の一則は馬駿といふ商人が颶風に遇つて中國から二萬六千里離れた大羅刹國へ漂着し、更に龍宮に入り浦島になつて中國にかへる。大羅刹國の風習は悉く中國と正反對で、中國で美男子といはれた彼がこゝでは化物あつかひを受け、顔に墨を塗ると急にちやほやされるといふ工合に、美醜の觀念が全然逆である。こんど初めて讀んで、鏡花縁の女子國は案外このへんから來たのではないかなどと思つて面白かつた。しかしこれがどうして清朝を譏つたのであるか私には解せない。いはゆる女の男装は滿洲婦人の旗袍を諷刺したものだといふのは、どこを指していつたのであらうか。また清朝の役人たらんことを志望して試験を受けてをりながら、どうしてもパス出來ぬからといつて、清朝を譏刺したのだとすれば、葡萄を酸いといつて惡態をついた狐に蒲松齡がなつてしまふわけで、それこそへんな話ではないか。また思ふに四庫全書は、さういふ嫌疑が有つたにせよ無かつたにせよ、聊齋のやうなものを收めるほど小説に對して寛容ではなかつたらう。四庫全書の總纂修たりし紀文達公が、假りに彼の聊齋ばりの小説集たる闕微草堂筆記を全書完成以前に作つてゐたとしても、果して自らこれを四庫に入れただかどうか、甚だ疑問としてよいであらう。(ついでにいふが、私は闕微草堂筆記を聊齋よりは優位に置くものである。勸戒の意の強まつたのは一寸困りものだけれども、何よりも聊齋のいやらしさの見られないのを取るのである。やはりこれは作者の人物のくらべものにならぬ立派さに因るのであらうか)

私は蒲松齡の人物のいやらしさを證據立てようとして、科學の一件を取上げ鬼の首でも取つたやうに色々云つてみたが、外によい材料がないからでもあるがどうもこれだけでは大した證明にならないやうだ。科學に對する當時の人々の考へ方は、私ども時代を異にし國を異にする人間には恐らく想像もつかないことであつて、蒲松齡一人を嗤ふことはあまりに同情を欠いた仕打であるに相違ない。私ははじめ聊齋のいやらしさの理由として、作者の抱いてゐる因果思想、或はそれに類する封建的な狭く暗い思想を敷へようと豫定してゐたが、これは一層苛酷な要求であつたやうに思ふから引込めることにした。因果思想はいやらしいものだが、今日でさへも非常に屢々もてはやされる思想であつてみれば、二三百年昔の人がこれをば堅く信じて疑はなかつたのは無理からぬことと言はねばならぬ。袁小修の日記を讀んで、ひどくそれが目ざわりになつて、かういふ物の解つた人にとつてさへ時代通念を超越することの如何に難いかを洪敷したことがある。いはんや蒲松齡に於いてをやである。唐代傳奇に見られるやうなあの高い、純乎として純なる、たゞひたむきに熱烈なる、しかもあくまで伸び／＼として寛濶なる精神を、明清時代の人に求めるのは初めから無理な相談といふものであつた。

聊齋をはじめから目のかたきにしてしまつて甚だ申譯ない次第であるが、――聊齋のいやらしさの理由はもつと外に在りはしないか。では四百三十一篇を全部讀破してわかるまで考へてみるに越したことはあるまい。しかし、私は聊齋はもう澤山だ。かういふ文語体の文章といふものは、どん／＼頁を繰つて讀むわけにいかぬものだ。どうも辛氣くさくていかん。それでは白話体のを讀むことにしようか。蒲松齡の著書は聊齋志異八卷（或は分つて十六卷とも爲す）だけではない。魯迅の小説史略に據れば、聊齋文集四卷、聊齋詩集六卷の外に、省身錄、懷刑錄、歷字文、日用

俗字、農桑經等の雜著があるさうだ。もつとも胡適の考證によれば、聊齋文集はどうも後人の僞書らしく、あまり信用の出来ないやうなことを書いてゐたから、私は屢々本屋の店頭でその本を見ながらつい手に取つてもみなかつた。なほ最近に至つて彼には白話文で書いた鼓詞や小説がいろ／＼あることが明かになつた。蒲松齡と郷里を同じうする山東淄川の馬立勛といふ、當時北京大學の學生が、親戚の家から得た未刊の寫本をもとにして、民國十八年に「聊齋白話韻文」一冊を北京で出版した。彼は更にその後も蒲松齡の遺著（長短合せて十一篇の鼓詞曲）を搜し出して發表した。東京の文求堂からも幾年か前に「磨難曲」が出版された。更に「醒世姻緣傳」といふべらぼうに長い白話体の長篇小説がある。長さからいつて百二十回の紅樓夢ほどではないにしても、それよりひどく短くはない。この小説の作者については從來明かでなく、「西周生輯著、然藜子較定」といふ署名を鵜呑みする外はなかつたのだが、民國二十年、胡適等の研究により、これも蒲松齡の作であつたことが考證された。大体信用してよいと私は思ふ。徐志摩が讀んで感激し、中國五大小説の一つだと太鼓版を押したこの醒世姻緣傳は、魯迅の小説史略の中に出てる。これが蒲松齡の作だとわかつてゐたら、勿論言及する所があつたに相違ないが、魯迅は恐らく讀まなかつたのであらう。或は讀んでこれを無視したのだとも考へられる。魯迅の好尚には一寸合ひさうもない小説だからだ。

そこで私は一日決心をして、買つたまゝ見もせず永い間押入の中に押込んであつた聊齋白話韻文と醒世姻緣傳を引出してそのほこりを拂つた。そして、二三枚もはぐらぬうちに、私は早くも何か得る所があつたやうな氣がした。すなはち聊齋のいやらしさはその文章から來るのではないかといふ一事に考へ及んだからである。さう考へると、閱微草堂筆記を聊齋の上に置かうとする私の半ば直覺的な評價もよくわかるやうに思つた。文章の氣品の問題であつた。

わかりきつた話ぢやないかといふ人があらう。たゞこれだけの事に思ひ及ぶのに甚だしくひまがかゝつたのは、ひとへに私の文章に對する眼識の不足の故である。そこへ行くと、白話文なら割に見分けがつきやすい。作者の感情なり思想なりが、白話文となると、どうしても表面に露骨に出て來ずにはゐないからだ。白話文と古文の相異點について藥堂先生がうまいことをいつてゐた。「白話文は袋のやうなものだ。何を入れても差支へないが、全然何も入れないと困る。そして何を入れても原物の形は外からそつくり見える。これに反して古文は箱のやうなもので、四角なものしかはいらぬ。圓いものは詰められぬ。だが何といつてもそれを空のまゝに、何も入れないでおくに越したことはない。」勿論、聊齋志異の古文は決して無内容ではない。それどころか、作者の話題は永久に盡きることがないかとさへ見られる。その上その筆もこれに隨つて實に驚くべく達者だ。實によくしゃべる。しゃべりまくつてゐる。これに惡達者といふ、と又憎まれ口になるが、私はさう謂はうと思つてゐる。聊齋文章のいやらしさは、つまりそこから來てゐるのだ。私は聊齋の白話文を讀んで、はつきりそれを知つた。

さて聊齋白話韻文は六篇の鼓詞を輯めたものだ。太鼓を伴奏にして節をつけて語る韻文の部分の主とし、その合間々々に説明の地の文を入れた、いはゞ浪花節と同じ形式の一種の語り物で、文字を知らぬ人々を相手に語つて聞かせるものであるから、まづ何よりも平易であることが第一要件であり、下世話に墮ちるのは毫もいとはないわけのものではあるにしても、よくまあ、かうもべら／＼しゃべれるものかと私は舌を卷かざるを得なかつた。中に就いて東郭外傳といふのが一番長篇だ。これは孟子の例の齊人有一妻一妾の章を語つたものであるが、たつたあの百七十字をこ／＼の文句に、尾に鱗を附けも附けたり、する／＼する／＼無慮五十頁の長さに引伸ばしてゐるのだ。大分品の下つ

たものになつてゐるのは已むを得ないとして、それにしても彼が實に樂々と、そしていかにも愉しげに書いてゐるらしいあたりを見ると、確かに彼は驚くべき一種の才能の持主であつた。大衆作家としての資格を十二分に具へてをり、彼をして今日在らしむれば、支那でならさしづめ張恨水、我國ならば吉川か三上か將た白井か、いや／＼中々それどころではない超弩級の大流行作家になつたであらうことは間違ひない。おつと、冗談ではない。現に彼の聊齋志異は二百年來「家々一本を藏せざるはない」といはれるまで支那の民衆の愛讀しておかぬ書物であり、四部書の素讀もろくにすまぬうちから人に隠れて偷み見するのは殆どきまつてこの本であつた。我國に於いても、支那の小説といへば昔からやはり聊齋が一番有名ではないか。彼こそは東洋に於ける最大の通俗流行作家であつた。私のいひ方は逆であつた。

閑話休題。以上、前置にしては大分長くなつた。これからいよ／＼本題の醒世姻緣傳の話に入らうと思ふ。

私はこの百萬字からある長たらしい小説を、いやらしい／＼と思ひながら、十何日もかゝつてそれでも兎に角よみました。読み易い白話文ではなかつた。例によつて實に自由自在な筆使ひで、滑稽百出の遊戯三昧、山東方言がふんだんにはいつてゐて、その點、金瓶梅詞話に使はれてゐることばと相似た所が多い。聊齋白話韻文にある馬立勳の附註で得た方言知識ではまだ足らず、癢いところに手の届きかねるじれつたさを始終感じさせられた。小説中の人物には殆ど一人として愛すべき人物、尊敬に値する人物は見當らない。むしろ唾棄すべき人物、憎々しい、滑稽なまで憎々しい人物によつて満たされてゐる。そして彼等の話すことばといへば、二言目にはピーといふあの淫猥なきたならしい語が出るのだ。かういふ猥褻語をことさらに口や筆に上せるのは、これは明末の風潮の然らしめたものであらう

か。それとも、山東あたりの人はそれを本来のきたない意味でなしに、たゞバカヤローといったぐらゐの意味で日常使つてゐたのであらうか。さういへば紅樓夢の戀人林黛玉でさへ「放屁！」といつたことばを平然と使つてゐる。三年の戀も一時にさめる何とも興ざめなことばで、我々としてはこれもベカと譯す外はないのであるが、支那人はどうもさういふ點にはあまり神経を働かさなぬものらしい。さうは思つても、二言目くらゐにそれが出ると、やはりよい氣持はしない。等々、その他まだ文句は澤山あるが、とにかく何とか彼とかいひながらも、色々な意味で非常に面白く感じてとう／＼おしまひまで読み、筋の發展が氣にかゝつて御飯に立つことを面倒がつたことさへ幾度かあつたところを見ると、私の趣味もよほど低級であるのか、或は大衆作家としての蒲松齡先生の腕前がよほど俵いのか、どつちかだらう。恐らく兩方だらう。

この小説は夫婦間の宿命的な相剋を描いたものである。いや相剋といふのは當らぬ。夫を刺する悍妻の圖である。支那のいはゆる「懼内」とか「怕老婆」なるものは、亭主を尻に敷くといつたことばで考へられるやうな生易しい明朗なものではなさうだ。子曰く、女子と小人は養ひがたし、これを近づければ不遜なり、これを遠ざければ則ち怨む。してみればそれは聖人すら恐怖し給ふ所であつた。漢の高祖や宋の陳季常や明の戚繼光將軍を擧げるまでもない。王陽明のやうな豪傑でも妻君には頭があらなかつたといふ話を、たしか野濶編かみて苦笑したことがある。支那は一般に男尊女卑の國だといはれてゐるやうだが、必ずしも事實はさうであるまい。紅樓夢なんかを讀んでもわかる通り、家庭内に於ける母權乃至主婦權といふものは、むしろ非常に強大なのが普通のやうに思はれる。男尊女卑なんてのは、大體あれは女權の伸張を押へるために考へ出された男の思想なので、もつ／＼女性に對する男性の恐怖心に

根ざしてゐるのではないか。この小説に現はれるじや／＼馬は、まことに男子をして戰慄せしめるに足るものであつて、それは前生での仇を討つために、再びこの世に生れがはつて夫となり妻となつたのだと作者は考へてゐる程である。それはいふまでもなく作者の誇張である。笑ひを催さざるを得ないまでに不自然に誇張されてゐる。けれどもそれが作者の偽はらぬ氣持に裏付けられてゐることも亦確かであらう。まあそれは大概にして次に大體の荒筋を述べることにする。

最初に「引起」と稱する序説がある。小説の主題を理論的に(?)説明したものである。作者はまづ孟子のことばを持ち出す。君子に三樂といふものあり、それは第一に父母俱に存して兄弟仲のよいこと、第二に仰いで天に愧ぢず俯して人に忤ぢぬたと、第三に天下の英才を得て之を教育することと孟子は言つてゐるが、作者にいはすれば、もう一樂を添へたいところだ。すなはち賢明盛徳の妻がそれで、これあつて始めて前の三樂も成就するわけである。作者は古い故事を色々あげて説明してゐるがそれは省略する。ところで古來賢妻にぶつかるとは中々容易でない。夫妻といふものは前生から定められてゐるもので、月下老人の赤い繩でもつて暗々裡に足と足を結びつけられた以上は、どんなに海山を隔てゝゐるようが、仇同士であらうが、二人は夫婦とならないわけにいかぬ。しかしともかくさういふ因縁で夫婦になつたのだから、あらゆる點で釣り合ひ、仲よく暮して行けさうなものであるが、實際上十人のうち八九人までは思はしく行つてない。これはどういふわけだらうか。アタマの釣り合はぬ夫婦がある。容貌の釣り合はぬ夫婦がある。夫が妻を憎み、或は妻が夫を虐げる。或は夫が妻を棄て、藝者を圍ひ、或は妻が夫にかくれて情夫をこさへる。さういつた夫婦の仲違ひは一体何に原因するであらうか。作者によれば、それはすべて前生前生の事なのであ

る。冥々の中に定つてゐたことが、一分一厘の狂ひもなく此世に於いて現はれたまでだ。世の中には世帯持ちがよく、舅姑によく仕へ、夫を敬ひ子を愛し、相嫌同士の折り合ひもよく、萬事きちん／＼やつて行く理想的な良妻がある。さういふ夫婦は、前世に於いて意氣投合した友達か、或は恩愛につながり合つた知己であつたのだ。或は義侠によつて救はれた恩を報ずるため、或は負債を償ふために夫婦になつたものもある。或は前世でやはり仲のよい夫婦、或は兄弟であつたものもある。だからさうして漆の如く膠に似たる好姻縁を成し得たのである。これに反して、前世に於いて、自分の強いのを笠に着て弱い奴をいぢめ、弱い奴は恨みを飲んで泣き寝入りするか、計略でもつて財産を横領したり生命を奪つたりするか、互ひにさういふ大きな遺恨を抱いた仇同士が、今世に於いて夫婦になる場合がある。さういふ因縁づきの仇同士がどうして反つて夫婦になるのか、そんなバカな事はないと云ふ人もあらう。一体世の中に夫婦くらゐ親しいものはない。父母兄弟といふものは天合の親であるとはいへ、その間には爲さんとして爲しえない、云ふに云はれぬことがいくらもある。ところが父母兄弟に對しては云はれぬことでも、夫妻の間なら心おきなく打明けられるものだ。しかしながら、事實世の中には、夫婦くらゐ憎み合ふものも亦ないのである。なぜか。

君臣の間ならば、桀紂のやうな皇帝であつたにせよ、こつちが役人にさへならなければそれまでで、それでも怪しからんとはまさかいふまい。親子の間ならば、瞽瞍のやうなひどい父母だつたにせよ、それも晝のうちに倉庫を作らせたり、井戸を浚へさせたりするだけで、夜になれば一息つくひまはあらうといふものだ。だから前世での仇を打つのに、稠人の中で報復するの物足らぬはいふ迄もなく、たとへ君臣父子兄弟朋友となつたところで、心ゆくまで報復することは出来ない。どうしても夫婦になるに限るのである。こゝで作者はうまい警句を吐く。曰く、夫婦

の仲は、たとへば喉首にできた瘤のやうなものだ。切取れば生命があぶないし、残しておけばそれこそ厄介千萬のしるものだ。晝間は逃れるに處なく、夜になれば一層我慢が出来ぬ。役所の法律も施す手はないし、父母の威光も役に立たぬ。兄弟も助けることは出来ぬ。隣近所の人々は徒らにつまらぬ取沙汰をするだけだ。相手に罵り殺され打ち殺されたところで誰ひとり間に立つて止めてくれる者もない。生きたいといへば相手はことさらに取り殺さうとする。死にたいといへばことさらに生かさうとする。累世不磨の鈍刀でもつてその頸の根つこをゴシ／＼やつて、これをこなごなに叩き碎かすにはおかぬ。かうした報復こそ、かの閻魔王の刀の山、劍の林、十八重阿鼻地獄にも勝るものではないか。

かういふ原理に基いて、話が二世に亘るから、この醒世姻縁傳は大きく二段に分れる。第一回から二十一回までと、二十三回から最後の百回までと。

時は本朝正統年間とある。なぜ「本朝」と書いたらうか。作者は明亡の年に僅か五歳又は十五歳であつたのだから、それ以前にこの小説を書いた筈はなからう。遺民氣取りに身は清朝に在つても心は明朝の人たるをほめかしたのでらうか。或はたゞ書物に時代を着けるためにさうしたのでらうか。一疑問である。處は山東武城縣。こゝに晁源といふ若者があつた。一寸見た目には眉目秀麗な好青年だが、アタマが悪く學問の方は空きし駄目である。因みに、この小説に現はれる主人公株の人々は、狄希陳だつて晁梁だつて、みな例外なしに容貌はよいがアタマが悪く、正面から試験を通つて行くには不得意な連中ばかりである。作者の事を思ひ合はせて苦笑される。この若者、その上に獨り子なもので、すつかり溺愛されて立派な息子に出来上つた。父は晁思孝といひ、これが亦お多分に洩れぬ萬年落第書生

であるが、或年ひよんな事から一高官の引立を蒙り、華亭縣の知縣といふ大した役人の口に見ん事ありついた。郷里ではその留守宅を巡つて大へんな騒ぎ方。今まで百文二百文の金を借りるさへ容易でなく、一二兩の借金をやい／＼責め立てられてゐたのが、今は手の平を返したやうに、百兩でも二百兩でもどうぞといつて向ふから持つて来る、用人に使つてくれと頼みにくる。十日もたゝぬうちに、家人數十名、金は數千兩に達し、晁源はみなからちやほやされて贅澤三昧、放蕩はます／＼つふる。さあさうなると貧乏時代に貰つた妻が急に鼻につきだして來た。妻は計氏といつて平凡な女であつたが、晁源の目からは天香國色に見え、かねて少からず懼れをなし、打たれても罵られても有難く頂戴するばかりであつたのが、こんどは立場が反對になつた。何かといへば、首を釣らうとしたりきれものを振りまはしたりした計氏のおどしの一手も、今は少しもこはいどころか、早く死ねばよい、そしたらもつと身分のよい家からきれいなお姫様を貰ふさと廣言する始末で、はては同じ家にゐながら夫婦別居し、計氏はその日の食ふものによさへ困るに至る。一方晁源は妾を取換へ引換へ、とう／＼小珍哥といふ馴染の女優者を八百兩の大金で妾にし、やくざ連中に取巻かれて毎日どんぢやん騒ぎ、或日のこといさ／＼か趣向をかへて雅山といふ處へ狩獵としやれ込み、小珍哥も男装して馬にのつて出かけた。

さてこの山の洞に千年の劫を経た牝狐がゐた。いつも女人に化けて村人をたぶらかしてゐたが、かね／＼晁源の男つぶりに惚れていつか物にしようと思つてゐた矢先とて、今こそよい折とばかりに、さつそく若い女に化けて晁源の馬の前後に付きまといつてゐたところ、不運にも鷹や獵犬にその本相を看破られ、驚いた拍子に狐の正体を現はし、晁源ののつた馬の腹の下に逃げこんで晁源に救命を求めた。しかし晁源は無情刻薄な男だものだから、忽ち一矢の下

にこれを射殺し、凱歌をあげて歸途につく。その夜から晁源は正体のわからぬ病氣にかゝる。小珍哥はあわ喰つて呼んだ醫者が選りに選つてひどい籤で、ろくに診もせぬうちから腎虚ときめてかゝつてゐる鹽梅であつたが、それでもまぐれ當りに一と月餘りで全快した。見舞にも來なかつた計氏とは完全に決絶した。さて死んだ狐の皮をみるにいかにもよい毛皮なので、馬の敷物にするつもりで家人に持たして皮匠へ走らせる途中、大きな鳶が空中より飛び來つて毛皮を掠つて行つてしまつた。除夕の夜、晁源の夢枕にその祖父が現はれて、彼が狐を殺したことを責め、また計氏を虐げる不心得をさとして、「前世ではお前は計氏の妻であり、計氏はお前の夫であつたのだ。しかるにお前が計氏を愛せずこれを欺いた爲、この世で計氏はお前の妻に生れがはつてお前に報復してゐるのだ。前世でいぢめた上に今世でも又いぢめると大變な事になるぞ」と戒しめる。馬の耳に念佛である。

父晁思孝は華亭の知縣として人民を苦しめることしか知らなかつたがへんに官運がよく、胡旦・梁生といふ二人の役者の手引で司禮監王振——有名な明末の宦官の大親分——に一千兩の賄賂をつかつて、北京に近い北通州の知州に榮轉した。そこで晁源も妾の小珍哥をつれて北京に入り、うまく立廻つて國子監の學生となり、毎日赤ゲツト振りを發揮しながら遊び呆けてゐる。折から也先入寇して邊境俄かに急を告げ、太監王振は自ら大功を立てんとて帝に親征をすゝめ、大小の群臣は大いに動搖す。この有様を見て晁源は官を捨てて親を捨てて小珍哥と共に郷里に逃げかへる。この子にしてこの父あり、晁思孝も、この際役人どころでない、也先の攻めて來ぬうちに三十六計逃ぐるにしかずと、病と稱して辭職願を出し、その卑劣な態度は當局の彈劾する所となつた。時に天子の親征實現して忽ちにして土木の變となり、帝は也先の軍に捕へられ王振以下主だつた者はみな殺されて、こゝに王振の息のかゝつた連中は悉く打倒さ

れ、胡・梁の二人も今は世を忍ぶ日蔭者の身の上となり晁思孝を頼つて来る。刻薄な晁思孝は勿論よい顔は見せぬ。しかしその二人は中央の要人になほ知己が多く、その手蔓でれいの彈劾の事も事なく済んだので、又も手の平をかへしたやうに二人を下にも置かずちやほやする。

さて郷里に歸つた晁源と小珍哥だが、小珍哥は計氏のもとに二人の尼が出入りしてゐるのを奇貨として、道士和尚と姦通してゐると言ひふらし、晁源と二人で計氏の追ひ出しを策する。計氏は門外に飛び出し隣人に向つて示威運動を行つたが失敗、二人への面當てに首を釣つて死ぬ。計氏の實家で二人を告訴したけれども、晁源が役所の上下に賄賂を使つた爲、裁判は反つて晁源の勝訴に歸して、こゝに小珍哥は天下晴れて正妻に直つた氣で大得意、晁源を尻に敷くことは昔の計氏以上だ。そして、はやく計氏の棺を捨て、來るやうに晁源にいひつけてゐるうち、俄かに亡婦計氏の魂が小珍哥に乗り移り、自分で自分の頬べたをピチャ／＼と猿の尻のやうになるまで殴りつけながら「賤賤淫婦！ 忘八淫婦！」と罵る聲が、いつの間にか計氏の聲そのまゝになつてゐる。しまひには「淫婦の毛を筆れ！ 淫婦の着物は剃ぎとれ！」といつて、自分の頭毛を筆り、着物を脱ぎ、ズボンまで脱がうとする醜態である。そこで晁源が「お前の爲にお經を十日間よんでやらう。棺桶も二百兩出して買つてやらう。卷き上げた土地もお前の父に返すことにする。その通りしなかつたら、俺に乗り移つてもよい」といふと、小珍哥は「あなたに乗り移つたとて何にもならぬ。あなたこそ私の本當の仇なのだ。あなたの運ももう永いことはない。今にまもなくひどい目に會はせてやる」といふやうな事をいふ。やがて正氣に戻るが、かうした發作は毎日おこり、ひどくなる一方である。

その後、貪官が退けられて再審が行はれた結果、小珍哥は死刑の宣告を受けて獄に投ぜられる。しかし晁源が獄中

の役人にたんまり袖の下をつかませたので、彼女は特別室を新築させて何一つ不自由はなく、むしろ天國の觀があり、女王氣取りにみんなを顔で使つて贅澤三昧、宴會はしよつ中ひらくし、晁源はよく寝泊りして行く。獄官の中には早くも彼女とよいことしすまた奴さへ少くないといふ始末である。

王振の殘黨に對する追求はいよ／＼ひどくなり、晁思孝父子は又も梁・胡の二人を荷厄介にしはじめ、折から通州に来てゐた晁源の策で、巧言を以つて二人を通州郊外の香巖寺といふお寺に追ひ拂ひ、二人の所持金六百三十兩を全部横領してしまふ。今まで晁思孝の政治顧問として一切を代つて處理してゐた刑臯門といふ理想的な幕賓も愛想をつかして去つたのでその後を晁源が引受けてやつたところが、公文書一つ満足に讀めぬやうな彼の事だから、忽ちへま百出、はては贖職罪に問はれて監察御史の彈劾を受けた。五千餘金を費つて運よく晁思孝の命だけは取りとめ、一家歸郷する。三十年の役人商賣に三萬兩の金を蓄めこんだので、五千兩位つかつても別にこたへぬわけだ。ところで晁夫人は梁・胡二人に對する晁源の無情な處置に終始反對してゐたが、悪い夢をみて一切を知るや、早速使ひを香巖寺に馳せ二人を急地より救ひ出し、且自分の膺繰金の中から六百三十兩を出して返す。二人は夫人の情深い振舞に涙をこぼして感謝する。かくて二人はそのまゝその寺に僧となり、名も梁片雲、胡無翳と改めた。

故山に歸つた晁思孝六十三歳、年甲斐もなく夫人附の小間使春鶯を妾にしたいと言ひ出し、とう／＼これを正式に妾にしたが、二ヶ月もたぬうち、かりそめの風邪にかゝり例の籤先生にかけたところ、又ぞろ腎虚と見立られ、そのためポツクリ死んでしまふ。ついでその葬式がすんで、晁源は雍山の田舎の莊園に勘定を取りに行き、そこに在る自分の持家を借りてゐる小鴉兒といふ皮匠の妻が一寸濫皮のむけてゐるのに迷ひ、小鴉兒の眼を偷む仲となり、つひ

に小鶯兒の知る所となつて、嫉妬の刃に臥してしまふ。

かくて晁家の父子相繼いで死し、數萬の家財を擁しながら後嗣がない（春鶯はすでに妊娠五ヶ月の腹をかゝえてゐたが）のを奇貨として、晁家の遠い親戚、即ち晁思孝の族弟晁思才と族孫晁無晏といふ二人の無頼が旗頭となり、多くの仲間を語らつて晁家に乗り込み、晁夫人に家財の分配を迫り、村の顔役たちの仲裁も物かは、家人を袋叩きにしてとう／＼家を占領し、あらゆる家財道具をどん／＼持ち出す。幾萬の（まさか）人々はたゞあれよ／＼といつて見てゐるばかり。偶々その表を通りかゝつた知縣の徐文山が中にはいつて騒ぎを取鎮め、嚴重に兇徒一味を處罰してくれたので一家は虎口を免れ、以後さすが無頼の徒も暫く晁家に寄りつかない。

さて通州香巖寺の僧梁片雲はかね／＼胡無翳に向つて「晁夫人は千百人中の女菩薩であるから、あの春鶯の腹に出来るのは必ず女兒でなくて男兒に違ひない。我々は夫人の恩恵を數々受けた。自分はその徳に報ゆる爲に、夫人の息子に生れがはるつもりだ」といふやうな事を話してゐたが、果して彼が圓寂すると同時に武城縣では春鶯が産氣づいて男兒を生んだ。そのとき晁夫人はうつら／＼まどろんで片雲が訪ねて來た夢を見て、その兒が片雲の生れがはりであることを信じ、片雲の姓を取つて、子供に「晁梁」といふ名を附けようと考へる。ところで早速徐知縣にも子の生れたことを知らせると、その時知縣は吉服を着けて縣學の明倫堂の上梁（棟上げ）を終つて歸宅したところであつたので、名を「晁梁」とつけるやうにといつて祝の品を送つた。夫人は偶然の一致、故なきにあらずと喜ぶ。思ひなしか赤ん坊の顔は片雲と瓜二つだ。「小和尚」と呼んで可愛がる。小和尚満月の祝に、晁夫人は晁思才等族中八人の者に各々田五十畝（合せて四頃、一千六七百兩に當る）その他雜糧銀子を分ち與へ、いろ／＼と仁慈の行爲が多いので、

その事を聞いた徐知縣は大いにこれを賞讃して「女中義士」の四字を題した匾額を晁家の門に懸げさせた。

以上が第二十二回までの荒筋で、前段はこゝに一先づ終る。二十三回以後は話が二つに分れる。一つは武城縣に生き残つた晁夫人や晁梁等の話の續き。もう一つは晁源やその妻計氏や妾小珍哥や雍山の牝狐や、それら前段に於いてすでに死んだ人々が、みな場所をかへて繡江縣（濟南の東方百十里）に生れがはり、相寄つて仇敵同士となる、その連中の話だ。勿論、小説の主流を成すのは後者である。二つの話は最後の第百回に到つて始めて結びつきはするが、それまでは全く無關係（少くとも表面上）に赤絲と白絲を纏り合はしたやうな具合に交互に語られてをり、讀者にとつて多少とも煩はしく感ぜられないことはない。それで今は話の便宜上、まづ武城縣の後日譚の方を全部片付けてから繡江縣へ移ることにしよう。

さてかの小珍哥は晁源の死後も相變らず淫蕩な獄中生活を續けてゐたが、つひに晁夫人の知る所となつて、仕送りもとめられるし、附添の二人の女中をも取り上げられて、彼女もさすがにこれには弱つた。一夜、女囚牢から火を發し、その燒跡から女の死体が一つ發見され、小珍哥の妾が見えないので、つつきり小珍哥の死体であると信ぜられたが、いづくんぞ知らんそれこそ彼女がかねて出來合つてゐた獄吏の張瑞鳳なるものと示し合はせての蟬脫の計であつたのだ。かくて彼女は潜かに張の家にかこはれることになるが、結局惡運盡きて露見し、二人とも刑死し、晁源と小珍哥との公案はこゝで終る。（第五十一回）

次に春鶯は十六歳のとき晁思孝の妾となり、思孝の死後晁梁を生んでからも晁夫人に仕へて子供の養育に餘念がなく、親が再婚をすゝめても聽かず、最後まで節を守る。（もつとも再婚問題に對する作者の見解は非常に寛容で、こ

れは禁止や強要をなすべきでなく、宜しく本人の自由意志にまかすべしといつてゐるのは正しい。晁梁も生れつき孝心あつく、母晁夫人が重病を患つた際など、股の肉を切つて療さんことを決心し、神明を感じしめて忽ち病氣が治つたやうな事もあつた。しかしアタマは大してよい方でなく、十六歳のとき府考に四番で及第して入學したのも、實は往年の名附親の徐知縣が、偶々學道となつて山東地方に出張してゐた、その引立てによつたものであつた。晁梁が入學すると、「晁梁は本當は俺の子だ」といひはる無法者が現れて、裁判沙汰となり、無茶な知縣の判決、また例の晁思才や晁無晏等のわるい親戚がこれを利用しての煽動などがあり、一時は大變な騒ぎであつたが、それも無事に納まつて、翌年かねていひなづけの姜氏と結婚式を擧げる。ところが晁梁は全くのねんねえで、今まで寢慣れた母晁夫人の寢床にへばりついて死んでも洞房に入らうとせぬ。とど姜小姐の寢床を晁夫人の部屋に持ちこむといふやうな滑稽な事件がある。それでもそこはよくしたものの、きつちり一年目には眞白く肥えた赤ん坊(全哥)が生れる。これも晁夫人の高徳の然らしめたものであらう。晁夫人の仁慈は年と共に深くなり、先に武城縣に饑饉があつた時には、率先して施粥所を設け、七ヶ月間に八千四百石の米穀を貧民に施したし、また晁思才や晁無晏の徒が機會ある毎に騒動を惹きおこしても、夫人は暴に報ゆるに徳を以つてよく大事に至らしめずにすんだ。ついで成化十四年、山東一帯に再び大飢饉がおこり、多くの百姓は食ふ物がなく、つひに人相食むの慘狀を呈したのだから、貢を納める餘裕など勿論ありはしない。にも拘らず縣官の徵求きびしく、未納者は枷にかけられ十人が十人とも死ぬ有様を見るに、晁夫人は、晁梁と相談して未納の糧米實數を調査せしめ、凡そ一千三百餘石を自ら代納してやつたのである。この賞讃すべき行爲には、あまり循良でなかつた知縣もさすがに面映ゆく、老夫人の誕生祝の日に老夫人と晁梁とにそれ／＼

「菩薩後身」「孝義純儒」と題した門匾を贈つた。その事は更に天子のお耳にまで達した。かくて晁夫人は百五歳といふ長壽を以つて光榮ある晩年を終り、死後は天神の宣により嶧山の山主といふ神様に封ぜられたが、それは甚だ靈驗あらたかな神様で、人民の深く信仰する所となつたのである。また晁梁は母の死後、通州の香嚴寺へ行つて胡無翳に會ひ、自分の前身たる梁片雲の法身を埋葬し、夫婦ともそれ／＼庵を建て、修行をすることになる。(九十三回)

以上で大体武城縣の話を終つた。次に繡江縣に移る。

一体この繡江縣といふのは附近一帶山水明媚、人情にも極めて篤い地方であるが、そこから四十里離れた明水鎮といふ村に狄員外といふ金持と、薛教授と呼ばれるもと袁州府學教授をつとめた人とが隣り合つて住んでゐた。狄員外には狄希陳といふ息子があり、薛教授には素姐とよぶ同じ年の娘があつて、六歳の時から婚約關係に在る。ところがどういふものか素姐は希陳が嫌ひでたまらぬ。希陳が遊びに來たと聞くと、すぐに門を閉めて隠れるのであつた。母が子供のくせにといつて叱ると、素姐は「何故かしらぬが、あの人を見るとへんにムカ／＼するのです」といふ。「今にあの人がお婿さんになつたらどうする」といふと、「そしたら私、晝間でなければ夜あの人を打ち殺してやります」といふ。實にひどい話であるが、後でわかる通り、狄希陳は實は晁源の生れがはりであり、薛素姐は晁源に射殺された牝狐の生れがはりなのだから、無理もないわけだ。

さて繡江縣の民風は時代が下ると共にだん／＼悪化し、從來の淳い人情美は更に見られなくなつたので天地がこれを怒つたものか、天災地妖しきりに起り、大饑饉に見舞はれる。貧乏人は樹の皮、葉、草、草の根を食べ盡すと、屋根の腐草を臼で磨り水でかきまぜて食ふ。山の白土を掘つて來て焙つて食ふ。こんなのを食ふと大抵死ぬのである。

仕方なしにこんどは死人の肉を切り取つて食ふ。しまひには生きた人間を食ふ。文字通り弱肉強食、それこそ食ふか食はれるかで、父子兄弟夫婦親戚の間、骨肉相殺し合ふに至つた。食ふ方では「赤の他人に食はれるよりは自分の骨肉を救つた方がましぢやないか」とリクツツをつけ、食はれる方でも「どうせ殺されなくても餓死するにきまつてゐる。生きて苦しむよりは早く死んだ方がましだ。人助けにもなる」とあつさり諦めてゐる始末だものだから、いくら役所で取締つても追付きはせぬ。書塾の先生が生徒を煮て食つた例なども出てゐるが、それなどは悲惨を通り越して滑稽である。——こゝらの話は必ずしも全然根據のない事ではないらしく、孫楷第が淄川・章邱等の府縣志を引用して詳しく考證してゐる。これは確かに食人肉習俗に關する一重要文獻たるを失はず、故桑原隲藏博士や鳥山喜一教授に獻呈いたしたいところだ。もつとも上海の陽其山先生の如きは、支那には文章文化と生活文化と二つある、日本の支那研究家はただ支那の文獻のみを信用し、それに盛られた文章文化を研究するばかりで、もう一つの、もつと大切な生活文化の方は全く見ようとせぬ、それが如何に確かな事實であつても文獻に現はれぬ限り見ても見ぬふり、聞いても聞かぬふりをする、といつてかね／＼憤慨してゐられる立場から、この間もさる雑誌（中國文學）に鳥山教授の食人肉の風習についての論文（「支那・支那人」所收）に對して反對を唱へてゐられるのを見た。現在上海の街上には無数の難民の餓死者がごろ／＼轉がつてゐるが、飢餓の極、人間を食つたといふ話は未だ嘗て一つも聞かぬといふ事實を證據にして、一二の例外はあるかも知らんが、さういふのは少くとも風習としては絶対に存在しなかつた、といふのが老板の主張の主旨である。残念ながら私は元來きはめて中途半端な人間に出來てゐるものだから、さてどつちの肩肌をぬいだものかとうろ／＼するばかりであるが、ただ、昔食つたら今も食ふ筈だ、今食はぬから昔も食はなかつたに

違ひないと断ずるのは、チト理屈が合ひすぎるやうで反つてへんな氣がする。老板はまた唐蕭村先生（多分？）の説をあげてゐられる。「人相食とか民相食とか云ふことは人間が人間の肉を食ふたのではない。それは或る食物を食ひ合ふたのである。又何時の世にでもインチキ師は居つたものらしい、兎の肉を鶏の肉と云ふて食はせることはあつたであらう」といふ説だが、サアこれもどうですかね、などと小首を傾けたら、そらお前もやつぱり文章文化の心酔者だと老板に極印を押されてしまひやせんかしらん。

閑話休題言歸正傳。さて狄希陳は八つのおき塾に入り、十二歳になるまで五年間勉強したのに、字一字満足におぼえぬかたいアタマの持主であつたが、その代り悪戯にかけては天才的などころを有し、手をかへ品をかへて先生を苦しめる。その例を擧げると面白いのだが、先を急がねばならぬからよす。とにかく還魂記に出て來る女中の悪戯などは比較にもならぬ。

彼は母の弟相棟宇の息子の相于廷や、いひなづけ素姐の弟の薛如下及び薛如兼と共に縣へ試験を受けに行き、その三人に答案を書いて貰つたおかげで首尾よく及第する。更に濟南府へ府考を受けに行き、これも四人揃つて及第し、他の三人はみな縣學へ入學したのに、彼一人府學に入學する。それといふのが、濟南で受験中に偶然知り合つた跑突泉の娼妓孫蘭姬に夢中になつた爲だ。蘭姬はさうした商賣女に似合はぬ氣のよい女であつたが、縁のないのは仕方がない、蘭姬はまもなく人に賣られることとなつて、二人は厭かぬ別れをしなければならぬ。

狄希陳と薛素姐との婚禮の行はれる前夜、素姐は夢にひどくうなされる。それは兇惡な神のやうなのが彼女の胸をたち切つて心臓をとり出し、別の心臓を入れ替へて行つた夢だ。婚禮の時には撒帳詩といつて洞房の前でわざと猥褻

な歌をうたふのだが、心臓の入れ替つた効果はてきめん、彼女はそれを聞くより忽ち眞赤になつて怒り出し、歌ひ手を口ぎたなく罵りちらす。とんだ花嫁御である。これが皮切り。それから自分の部屋に門をさして花婿を入れなさい。姑が聲をかけても返事をしない。翌日も同様である。實家の母が心配して懇々といつてきかせると、「なぜあの人が憎いのか私自身にもわかりません。今、あの人の事を考へただけで、ほら私のお腹がこんなに波打つてゐます」

素姐の亂暴はつのである一方で、毎日々々理由もなく夫を殴る。女中の手足をくゝつて殴る。姑がとめだてすると姑に突つかゝる始末に、姑もつひに腹を据ゑかねて素姐を笞打つ。そのひまに希陳が逃げ出したら、素姐は怒のあまり眞夜中に家火をつけようとする。娘を説諭しに來た薛教授もあまりといへばあまりの事に火のやうに怒つて歸つてしまふ。狄希陳の背中は笞のために腐れた黃瓜のやうになつてしまつた。

狄希陳、首尾よく府學に入學したものの、それから先きの試験はとても自信がないので、百四十兩の金を官に上納すれば、うまく行けば通判の役に選ばれると聞き、國子監の監生よりはよほどその方が徳だと、その手で行くことにきめる。その必要から方々の兩替屋をまはるうち、ゆくりなくも今は兩替屋の奥さんに納まつてゐる孫蘭姬に會ひ、紀念のハンカチや女靴などを贈られる。ところが歸郷後うつかりこれらの品を素姐に見つかり、又しても大折檻、喉元を爪で搔き切られて深さ二分、長さ五寸もある三筋の傷を負ふ。素姐は更に希陳の足を寢台の脚に縛り、靴底を縫ふのに用ひる大針でもつて希陳をぶすく、突き刺し、ヒー／＼悲鳴をあげさせる。姑が見かねてとめると、こんどは姑を口ぎたなく罵る。

希陳は國子監に入るべく父の狄員外と共に上京し、童七爺といふ烏銀鋪の主人の家の一部を借りて住む。童七の妻

の童奶々が世話好きな非常に賢い女で、親身になつて彼等の世話を焼き、狄員外が料理人に死なれて（その料理人は悪事を働いた天罰で雷に打たれたのだ）大いに困つてゐるのを見て、再調羹といふ十八になる女を見つけて狄員外の料理人兼帯の妾に世話してくれる。この調羹は料理も上手だが、ことに蔭日向なく働く氣立のよい女であつた。狄員外が突然この若い妾を連れて郷里に歸つたのを見ては、それでも員外を尻に敷いてた老妻だ、もとよりよい顔はしなかつたが、嫁の素姐にほと／＼手を焼いてゐた彼女には調羹の氣立のよさが嬉しく、やがて何につけても調羹を頼りにするやうになつた。ところで素姐にしてみれば、もしも調羹に員外の子供が出来たら、その子に家産を奪はれるだらうといふ心配がある。そこで男に子供が出来ないやうにしてやるべく、男の寝てゐる枕元を覗つたことさへ一度ならずあつた。また近々自分の弟の薛如兼のもとに嫁入りする夫の妹巧姐のために誂へられた嫁入道具の新しい寢台を、自分の古い奴とすり替へ、そのうへ首飾まで奪はうとする。それやこれやで腹を立て通しの狄員外夫婦はとう／＼病牀に枕を並べて臥せる身となつてしまふ。

一日希陳が調羹と軒下でちよつと立話をしてゐるのを素姐が見つけて、姦通だ私情だと言ひ立て、嗚鳴りつける。希陳が逃げようとする、素姐「逃げる氣なのかい、私の部屋に來なさい」とその一言は希陳を金縛りにしてしまひ唯々として従はぬわけには行かぬ。そこで素姐から鐵のやつと、こでもつて無茶苦茶に殴りつけられ、救けて／＼と悲鳴をあげてゐるわが子の聲を聞きつけた狄婆子、夫の員外に早く救けに行くやうに頼む。しかし員外は「男が嫁の部屋にはいるわけには行かぬから」といつて素姐の部屋の外から聲をかけるが、中々埒のあく事ではない。狄婆子と／＼氣を焦らし、病を押して椅橋に乗り、それを二人の女中に擔がして素姐の部屋に乗り込んでとめるが、素姐は

それでも殴る手を休めない。婆さんはつひに氣絶し、あわてゝ介抱したがすでに万事休す、そのまゝ冷くなつてしまつた。

素姐の父薛教授はその知らせを受取るや否や、これ亦かつとなつた拍子に、狄婆子の後を追つて死ぬ。こゝに至つてさすがの素姐もいくらか怖氣がついた体であつたが、それもほんの一時の事。狄婆子の弟(相棟字)の妻の相大始子から手ひどい毆打を蒙るや、素姐はその報復の相手を又しても夫に求め、希陳を寢室に監禁し、腰掛の上に仰向けに寝かせて、兩手を後手に縛り、更にその上から三本の麻繩でもつて胸腰足を腰掛ぐるみまるで死んだ豚でも縛るやうに縛つて、一晚中うん／＼いはせ、翌朝になつて繩目だけは解いたが依然部屋隅の隅に押し込められてゐる。例の叔母さんの相大始子がとう／＼捜し出して外へ引張り出さうとするが、希陳「一寸待つて下さい、奥さんのお許しがまだ出ませんから」と素姐の顔色をうかがひながら、頑強に拒む惨めさ。

何とかして素姐の性根をなほしたいと狄希陳はもとより、素姐の弟の薛如下や、いな素姐自身も熱心に希望して、いろ／＼やつてみるが駄目だ。何べんかインテキ師の手にうまく引かゝつて大枚の金をしてやられた。またある時は薛如下の計略で素姐の平素大きらひな鳶(狐に鳶は苦手な理屈だ)を素姐の部屋にそつと入れるのに成功して、素姐を人事不省に陥らせたこともあつたが、それもすぐにはけりとなほつて、一層ひどく夫に當ることになるのが關の山だ。

一方また希陳の悪戯が過ぎて、同窓の張茂實とその妻の智姐を怒らせひどい目にあふ。即ち智姐は素姐を焼きつけて、希陳を軟禁折檻させる。また張茂實は宴を設けて希陳を招き、素姐が使ひをやつて希陳を呼び戻させるが、茂實が希陳の腕をつかまへて離さぬ。すると希陳はその場に有りあはせた草刈鎌でもつて我とわが腕を切つてまで行かう

とする。幸ひ片輪にはならぬが大傷を負つて血達磨のやう。それをまた素姐が聞きつけて宴會の席へ躍り込む騒ぎ。明水鎮にかさま宗教を唱へて無知の子どもを集めぼろい儲けをしてゐる老侯・老張といふ二人の道婆がゐる。かね／＼よい椋鳥とねらつてゐた素姐を、とう／＼うまい事をいつておだて上げて仲間に引きすり込み、しよつちう泰山の頂上舂々のお祭だの何だのといつては方々へ連れ出す。素姐はもちろん外をほつつき廻るのは大好きだ。みんなが止めても聞くことではない。そして希陳は人目を恥ぢて袖で顔を隠しながら、また痛い足をひきすつて、いつも奥様の召さるゝ驢馬の纏をとつてお供しなければならぬ。素姐はまた老侯・老張を師父（お師匠様）と呼び、自ら徒弟と稱してゐるからとて、いやしくも國子監學生たる希陳にも同様のことを強ひるのであつた。ある時、やはりさうして大舉してお宮詣りの途中、通仙橋のたもとに待伏せしてゐた村の悪少のために取圍まれ、頭の道具は奪はれる。着物は剥がれて赤裸にされる。それは思ひ切つたひどい目に會はされた。この騒動はとう／＼役所に知られて希陳はきつのお目玉を食つた上、家にかへると素姐に逆に怨まれて又々折檻。素姐の怨みはそれだけではまだ／＼晴れず、自ら白い喪服を着け、「忌はしき瘡の病のために相繼いで身まかりし亡夫狄希陳、亡弟薛如下及び薛如兼の超生のためにこゝに施餓鬼を行ふ、狄門薛氏」と書いた旗を立て、十二人の尼と共に經をよみ太鼓を叩いて街まはりをするのにはそれを見た薛兄弟も思はずぞつとしたのであつた。

素姐は希陳に夏中蚊帳を釣ることを許さなかつたが、成化帝の登極により全國の監生を京師にお召しになつたのに應じて、希陳は上京することになる。素姐は夫を蚊の餌食にさせずに生かして逃がすのが口惜しいとて「あなたの行く道に馬賊が現はれて刀であなたを一万べん切り下し、あなたの身体を九千九百九十九に切つてしまへばよい。あな

たが深い谷底に足を滑らせてころげ落ち、泥んこのやうに、醬油みたいになつて腐つてしまへばよい……」と呪ひの餞行をおくる。

さて狄希陳は妻の手を脱れて上京、例によつて童七奶々の家に下宿し、首尾よく蔚經歷といふ役につける資格を得る。そして童奶々の娘の童寄姐を妾に貰ふことになり、二人の仲は非常によい。ところが寄姐の小間使として買入れた珍珠といふ十二になる小娘を、どうしたものか寄姐がまるで前世からの仇のやうに憎み嫌つて虐待を加へるのである。實はこれも無理からぬので、この寄姐こそ前世に於いて小珍哥に殺された晁源の妻計氏であり、珍珠はその小珍哥の生れがはりなのである。話は前に戻るが、かの計氏が、その死の直後、姑晁夫人の夢枕に立つて、どうか私のために法事を營み冥福を祈つて下さる様にとお願いしたので、晁夫人がその通りしてやると、計氏は再び夫人の夢枕に現はれ、實は私の前生は狐で、さる家の女中に生れがはつたが、殘茶殘飯を粗末にせずには落ちたものは拾つて食べたので、この世ではお宅のやうな立派な家の奥さんに生れがはつたわけです。ところが私の氣立がよくなく、夫を苦しめた爲、來世は再び狐に生れがはるべき筈のところ、こんど私のために三千卷のお經をよんで下さいましたお蔭で、また女身に生れがはるようになりました。北京平子門内の烏銀匠童七の娘となり、十八歳にして又も晁源の妾となるでせう（この世の仇を報ゆる爲）といふ。晁夫人が、こんども妻になつたらよいのに、といふと、晁源の射殺した狐がすでに妻になつてゐますからと答へるのであつた。妻と妾と二人でもつて、希陳（晁源の生れがはり）をして逃げるに場所なく、泣くに泣かれず笑ふに笑はれず、役所に訴へることもならず、晝も夜も辛い目に會はせて仇を打たうといふのであるから、希陳もたまらぬわけだ。

さて郷里では狄員外の妾調羹の腹に男児が生れたので、家財を獨占しようと思つたアテのはづれた素姐は、その兇を目の仇にして殺害を企て、狄員外は怒つた餘り瀕死の床に就く。希陳は急遽北京から歸郷する。しかし素姐が窓の外にがんばつてゐるので狄員外は息子に遺言一つすることが出来ない。しかも彼女が便所に立つたひまに何か一言いつたことを知るや、素姐は腰掛で希陳をさんぐに叩きのめし、つひに狄員外を氣死せしめたのである。狄員外の死んだあとの家はまるで焼跡、希陳は飯も満足に食へない有様だ。そこで父の葬ひがすむと、彼は土地を全部人に貸し、その地代を悉く素姐の自由裁量にまかせ、自分は四千兩の金を帶して逃げるやうにして上京する。そして小さな質屋を開いてほつと一息ついた。

あとに一人残つた素姐、今は誰に氣兼ねない。家は例の道婆や尼といつたうるん臭い連中の寄合所みたいにして、それらと一緒に方々のお寺やお宮へ遊びにほつつき廻つてゐる。彼女の誕生祝の日には自分の家で人形芝居をして遊び、猿廻しの猿の衣帽が見すばらしいとて夫希陳の着物や頭巾を小さくして猿に着せ、また狄員外夫婦の着物をこわして人形に着せ、人形はみな員外夫婦、猿は希陳といふことにして、みんなでふざけた。さうして幾日かの芝居がすんだ後も、二つの人形と猿だけは家に残しておき、毎日これを罵つたりぶん殴つたりするのだつた。ことに猿がもう猿でなくて本當の希陳であるやうな錯覺をおこして、素姐は毎日々々本氣になつて殴つた。怨みに燃えた猿はひそかに鎖を少しづつ磨つて、一日いきなり力まかせに鎖を斷ち、素姐の肩に飛びかゝつて彼女の鼻にかみつとき眼玉をえぐり出し顔中引搔きまはした。爲に素姐は命だけは取りとめたが、片目はつぶれ鼻は鼻け、顔は傷だらけになつて、まるで二目と見られぬ醜態なお面相になつてしまつた。しかも素姐は、希陳の爲にさういふ目に會つたやうな氣がして、

猿は怨まずにただ希陳を怨み、果ては桃の木の人形ひとがたに希陳の生年月日をかいて針を幾本も打つて呪ひ、それでも効果がないと聞くとますます嘖恚の焰を燃すのであつた。やがて希陳が北京で妾を持つてうまくやつてる話を洩れ聞くと素姐は火の玉のやうに上京してその家に飛び込む。折から希陳は一年ぶりで歸郷してちやうど彼女と行き違ひになつたから、まづは大事に至らずして済み、ことに童七奶々の氣轉ある處置に、素姐はとうとう要領を得ずに歸郷する。

さて希陳と童寄姐との折合は甚だよいが、美しい小間使の珍珠ゆゑに屢々反目が生ずるやうになり、寄姐の性格がだん／＼と素姐に似て來る。珍珠を空屋に監禁して飯もろく／＼食はせてやらぬ。また自分の簪の「壽」の字をハンコにして毎朝希陳の陽物に押し、夜寝る時に調べて磨れて消えてゐるとひどい刑罰を課するといふやうな事をする。素姐を閻魔とすれば寄姐は羅刹といふところだ。つひに珍珠は首をく／＼つて死んだので、寄姐は控訴されるが、童七姐々や相于廷（今は出世して主事になつてゐる）の善處で罪に問はれず済んだ。

やがて希陳は三千兩で從七品の中書といふ役人の株を買つたが、最初の日の進朝謝恩に朝寝をして遅刻した爲、一級を下げられ四川府經歷に任命せられる。それから万事都合よく、周景揚といふ人格才幹共に優れた人を幕賓に招くことも出來たし、またその周の友人でこんど四川成都衛の總兵として赴任する郭威といふ將軍と同道することになり、寄姐と共に水路四川へ出發する。しかも童七姐々の計略が圖にあつて、素姐は郷里にうまく置いてきぼりにされたのである。だが、やがて狄家の悪料理人呂祥から委細を聞いてうまく乗せられたと知るや、素姐は大いに怒つて呂祥と共に大運河つたひに彼等の船を追ひかけて南下したが、淮安まで行つても追付けない。とう／＼諦めてそこの金龍大王廟の縁日を見物し、夫の死を神に祈り、芝居に見惚れてゐるすきに、呂祥の爲に持物全部、二匹の驢馬まで

もかつさらつて逃げられ、さすがの素姐も進退これ谷つた。幸ひ助ける人があつて辛うじて郷里に歸る。そして歸るや、さつそく夫希陳を謀反人として役所に訴へ出、反つて誣告罪に問はれ、ひどい目に會ふ。

さて狄希陳一行の船旅であるが、狭い船の中に顔つき合はせて幾ヶ月かの旅を續けるのであるから、夫婦喧嘩はしよつちう起きる。ある時などは寄姐が河の中に飛び込まうとして大騒ぎを演じ、郭總兵の船に使ひを馳せて救援を求めさせたところ、郭の船でも二人の妾（京師で求めた權氏と戴氏）と三巴の大喧嘩の最中なので笑ふにも笑はれぬ。周景揚の仲裁でまづは八方圓く納まり、ともかく四川に安着する。「京師の婦人よりは廣西の苗族の方がよつぽぎ治め易い。一個の大將軍、八面威風のワガハイも彼女等には降参狀をたてまつる外はない」と郭將軍つくづく洪敷を發する。

四川の縣衙に落ちついた希陳一家、衙舎の隣が刑廳で、その推官（司法關係の長官）吳以義が希陳の從弟相于廷と同郷同門同年であるところから非常に親しく付き合ふことになるが、この吳推官がまたお多分に洩れぬ懼内者列傳中の人物。今まで荷葉・南瓜となづくる二人の妾だけでも手こずつてゐたところへ、郷里から正妻が來たのだから容易ならぬ。吳推官は、表の役所に出て裁判しない間は、奥の官舎で大奶々（正妻）から刑罰に問はれる、と専らの評判である。（支那の役所は大抵その奥が長官の官舎になつてゐる。）實際それは事實なので、裁判の時刻になつても吳推官、一向に奥から出て來ぬことが多く、督促に行つたものが門番から「只今奥様御折檻中」といふ返事をうけることが屢々である。

或時こんなことがあつた。みんなが自分の懼内ぶりを噂し合つて笑つてゐるのにフンガイした吳推官は、本府の文

武官員はじめ醫者と僧侶とか地方の重要人物が四五十人も集つた際、一寸豪放なところを見せていつた。「吾々鬚眉の男子も往々にして婦人に制せられる。試みに内を懼れる者と懼れない者とどちらが多いものか研究してみようではござらぬか。一人々々拙者が名を呼ぶから、懼内者は東側、懼内せざる人は西側に並んで貰ひたい。我と我が良心に照して僞つてはならぬ。人を欺くは天を欺くことござるぞ。拙者はもちろん第一の懼内者ですから東側に立ちます。」そこで一人々々名を呼ぶと、東側に立つ者が十の八九で、西側は十の一二もない。ただ一人、狄希陳がうろ／＼して、東にも西にも落ちかかねた様子だ。どうされたと訊ねると、「小老婆(妾)を怕れるものは、一体どちらに列ぶのですか。」それからまた坊主一人、「自分には妻がありませぬから」といふ。「妻はなくとも徒弟はあらう。徒弟を怕れる者は東ぢや」と吳推官。そこで坊主は顔を赤めながら東の列に加はつた。結局西側に立つたのはたつた二人きり。一人は八十七になる府學の教官で、妻を喪つてから二十二年になるといふのと、もう一人は遠く北直隸から家族を連れずに赴任して來てやもめ暮しをしてゐる倉官。こゝに於いて吳推官徐ろにいふ。「これに由つてこれを見れば、世上の男子みな内を懼れざる人なしですな。陽消陰長の世道ぢやもの、君子は小人を怕れ、活人は死鬼を怕る。丈夫いかでか老婆を怕れざらんやです。拙者が奥様の怒りに觸れて足止めを食ひ、すぐさま堂に上ることが出来なかつたからとて、同僚の諸君のうちに拙者を誦笑せられた向きもあつたやうだが、結果はかくの如し……。今日の事は、拙者も諸君もみな同調でござるて。ハハハ……」

狄希陳の官運甚だよく知縣代理をつとめ、周景楊の働きで坐ながらに二千兩以上の金を儲けた。加うるに寄姐は成都に來てから男兒を儲け(成哥と名づく)心すでに満ち足りてゐるので大して亂暴ないぢめ方はしなくなり、希陳さ

ながら天國にゐるの感である。しかし、喜び極つて悲しみ生ず。思ひがけない、素姐が山東から万里親征、はるく四川へまでやつて來ようとは。彼女はもと／＼あまり遠いので行く氣はなかつたのだが、野放圖な金の使ひ方をして次第に暮しにも困つて來たのと、例の候・張の二道婆がしきりに四川行をすゝめるので思ひ切つて行く氣になり、その連中と一緒、途中方々見物しながら成都に安着、いきなり希陳のゐる役所に飛び込んだ。夢さら思ひがけぬ事ゆゑ、希陳はうろんといつたきり、目が釣りあがつてそのまゝ人事不省。役所中上を下への大騒動となつたが、そんな事を氣にかける素姐ではない。

寄姐はじめ素姐の奇怪なお面相に恐れをなしてたじ／＼と押され氣味であつたが、そばに附いてゐるしつかり者の女房に勵まされて勇氣をふるひ起し、大勢寄つてたかつて素姐を袋叩きにする。これにはさすがの素姐も平謝りに謝つて無條件降服を申込む外はない。無論それも一時の方便、兎も角この家に居据はつて機を視はうといふ算段だ。希陳は随分と警戒を嚴重にして外の書齋で寢泊りしたのだが、とう／＼素姐に取捉まつて棒で殴られること六百、幸ひ寄姐が馳けつけたから死ぬことだけは免れた。「小杖則受、大杖則走」これ吳推官が教へた妻の折檻に對する秘法であつたが、それも素姐に對しては丸で用をなさぬ。

次に希陳が戸口の布簾をかゝげて這入つて來た所を、火慰斗に炭のおき火を一ぱい入れて簾の蔭に待伏せしてゐた素姐が、いきなりその襟首をつかまへて炭火を首の中につき込み、希陳に七轉八倒の苦しみをさせたことがある。その時そばは居合せた周景揚が、あまりといへばあまりな亂暴さにひどく憤慨して素姐をどなりつける。「むかし蘇東坡が陳季常に妻を打ち、陳芳洲が高相公の妻を打つたのは、みな我輩俠氣男子として然るべき事で、そんな女は殺し

たつて何かまふものか。それにしてもわが狄友蘇（希陳の號）も變つてゐる。何もわざ／＼希陳なんて名を附けずともだ。陳季常を希ふといふ意味に違ひあるまいが、一体陳季常のどこかよくて希ふのだ。彼の怕老婆ぶりを希ふつもりなのか。それに號も號だ。友蘇つて一体何だ。蘇東坡の友人となる意味か。俺こそは蘇東坡、柳氏のやうな惡婦を打つのは慣れたものだ。さあ、俺の前へ出て來い」と反り身になつて啖呵を切つたまではよかつたが、その後からそつと忍び寄つた素姐、大小便の一ぱいはいつた便器を周景楊の頭からさんぶり。腰掛の上になん／＼呻き聲を立てゝゐた希陳までそれを見てげら／＼笑ひ出す始末。周もこれには怒るよりも、ただ／＼舌を巻いて讚嘆、河東獅子吼といはれた陳季常の妻柳氏もこれには三舍を避けるだらうと。

かくて希陳が役所を休んでばかりゐる、その原因が惡妻に在ることを知つた府尹は、これもやはり同病相憐むの情から、應分の力は貸すから素姐を離縁したらどうかと親切に希陳に勸告する。希陳が熟考の上さうすることに決心して周景楊に相談すると、周はこれ亦變つてゐる。素姐にあれだけひどい事をされたのをちつとも恨まずに、いろ／＼例を擧げて人の爲に離縁をすゝめた人の終りのよくなかつたことをいつて賛成しないので、希陳も思ひとどまる。

そのうちに郭總兵が大功を立て、榮轉歸京するに決し、周も歸京の意志を洩らすし、折から希陳も上司から「家政紛れて亂糸の如く、妻妾は繼母よりも毒」といふ考語を買つたので辭職して一緒に歸京することにする。

舟が通州まで來た時、退職官吏の入京が事によつて差止められてゐたので、やむなくこゝに逗留、ゆくりなくも香巖寺に遊び、胡無翳や晁梁と會つた。晁梁は希陳が前世では自分の兄晁源の生れがはりであることを知り、その今の苦しみから救つてやる決心をする。

四川から歸る船の上で素姐は希陳を害しようとならつてゐたが遂にその折がなかつた。こゝで希陳が便所から出て來たところを、部屋の中から矢を射てあてる。大騒ぎをしてゐるとき胡無翳が突然助けに來た。素姐口をきはめて胡を罵ると、胡は茶を指にしたして卓の上に一匹の蝸を描き、それを指で弾いたかと思ふと、それは忽ち本物の大きな蝸となつて素姐の口に食ひついた。希陳の矢傷は百日で治つた。無翳のすゝめで金剛經一萬卷を誦むと、素姐は次第に病氣になり元氣が衰へ行き、今までの兇惡な性質がだん／＼と失はれてつひに死ぬ。希陳は夢によつて前世の因縁を悉く知り、鄭重に素姐の死骸を葬つた。そして寄姐を正妻になほし、以後は世の爲、人の爲に功德を行ひ、郷里の人々にも敬愛され、八十七歳を以つて首尾よく極樂往生、めでたし／＼。

のんべんだらりの梗概、私も書きくたびれてしまつたが、まづかういつたやうな小説。

薛素姐とか狄希陳のモデルは必ずしも全然なかつたのではないらしい。勿論作者自身の事ではあるまい。彼の妻は前にも一寸觸れた通りごく溫良な女だつたのだから。彼の一族の中にひどい悍馬がゐる作者夫婦もさん／＼手こずらされたらしいことが、彼の「元配劉孺人行實」にも出てゐるから、そんなのにモデルを求めたのに相違ない。又この小説の「凡例」にもわざ／＼晁源、狄希陳、寄姐、素姐等はみな本姓に非ず、その實跡を以つて人に暴らすを欲せざる也とことわつてゐる所からもそれと察せられる。聊齋志異の中にもいくらか懼内者の話が見出される。「江城」とか「邵女」とか「馬介甫」などいつたのがさうだ。ことに「江城」に出て來る人物は、名前こそちがつてゐるが、醒世姻緣傳中の人々と殆ど同一人といつてよい程似てをり、大体の筋も、作の主旨も、大同小異である。なほ「禳妬呪曲」といふ鼓子曲を私はまだ見てゐないが、胡適によればそれは筋はもちろん、中に出て來る人物の姓名も、全部「江

城」のものをそのまま持つて來て作り換へたものださうだ。即ち蒲松齡は、醒世姻緣傳を作る前に、短篇ではあるが、同じ趣向を色々に書き試みてゐたのである。これだけの長篇であるから、書くにも相當の年月を要したことであらう。この趣向に對しての作者のもつてゐた執着は並大抵ではなかつたと察せられる。私はこゝで、作者が一種の虚無觀といつたものを抱いてゐるのではなからうかといふ問題にぶつかるとは、――。

私は初めからいやらしい／＼と思つてこの小説を讀んだのだつた。文字がいやらしい。思想がいやらしい。出て來る人物が、またその爲すことすることが、悉くいやらしい。にも拘らず途中で私は屢々ふき出して面白がつた。こんな小説を面白がるなんていやだな、自分の趣味の下劣さを示すやうなものぢやないかと舌打ちしつゝ、結局しまひまで讀んでしまつた。いやらしさもこゝまで徹底すれば反つて又一種の風趣を生ずるのであらう。醜の極が美に歸し、悲慘の極が滑稽に歸すると同じことだらう。いや實際この作者の筆は暢達自在で、ユモアにみち、現に私をさうしたやうに、最後まで讀者を引きずつて行く力を十二分に持つてゐるのは確かだ。それにもう一つ私がこの小説を熱心に讀んだ原因があつた。それはこの中に當時の社會事情が非常に寫實的に詳しく描寫してあることで、その意味でこの小説は明代社會史の屈竟の資料になると思つたからだ。食人肉の風習については前にも言及したが、その他一般社會の經濟生活、家庭、官界、或は書塾とか科擧制度又は淫祀邪教の内幕、そんなものの、正史や普通の本には出てゐないやうな事が随分出てをり、そして大體根據のある事實と見てよいのだ。

だがそれだけがこの小説のもつ意義の全部であらうか。私は今や、何かしらんが、作者の抱いてゐる虚無觀といつた、ある大きな堅い壁のやうなものにぶつかつてひやりとした思ひをしないわけに行かぬ。夫婦關係をはじめ、人生

のすべての關係を、みなこれ前世の因縁因果として片づけてしまふ。人間の意志などといふものは、その前には微塵の力すら持たない。聊齋志異の自序を見ると、彼自身、僧侶の生れがはりであるといふやうなことを書いてゐる。達觀者の目からみれば、人生とはまづこんなものだ、といはんばかりだ。しかし同時に又、正面からはあくまでそんなことを言ひきりながら、作者は心の中ではまるでそんな事は信じてゐないで、花のお化や狐の生れがはりや、そんな話を眞顔になつて話してきかせ、どうだ面白いか、あはゝゝと讀者と一緒にただ喜んでゐるんぢやないかといふやうな氣もする。いやらしい〜といつて最後まで讀むやうな奴を、いやらしいかね、と作者はニヤ／＼するかも知れぬ。讀者にとつても作者にとつても、面白くて、そしてひまつぶしになりさへすれば、それでいゝぢやないか。

作者の正體がわからぬ、こいつが一番おそろしい。水滸傳をよんでも、西遊記や金瓶梅をよんでも、總じて支那の小説を讀んで、何かある一種の底氣味の悪さを感じるのは、それだ。作者がどこまで本氣で、どこからが冗談か、それがわからぬ。支那の小説にはつきものもつともらしい因縁話や鹿爪らしい教訓が、どこまで信用して聞いてよいのやら、あまり正面から正直に受取つて、いやらしいといつて顔をしかめたり、成程御もつともと合槌を打つたりしてゐたのでは、どんな所で作者からスカタンを食らはされんとも限らぬやうな氣がする。ドンキホーテはセルバンテスがつたのでなく、後世がつたのだといふ言ひ方があるさうだが、支那の小説も大抵その流儀で片付けられさうだ。水滸傳はたしかに施耐菴や羅貫中の作といふよりは、金聖嘆がつたといつた方が本當に近い。西遊記だつて何だつてこれから作られねばならないものだらう。醒世姻縁傳だつてやはりその一つだ。無論ドンキホーテはセルバンテスが作つたと見ても一向差支へなく、それだけで十分面白いし、後世をして作りかへさせるだけの大きさをセルバ

シテスはもとく持つてゐたのだ。醒世姻縁傳も同じことだ。私の話は、本當はこゝらあたりから出發しなければならぬ所であつた。しかるに事志とちがつて、くがらぬことに紙數を費してしまつた。聊齋のいやらしさを繰返して知らずくかういふいやらしい文章を草してしまつた。固より分の宜しさであるとはいへ残念である。(十月八日)